

《書評》

*Nuclear Minds: Cold War Psychological Sciences and
the Bombings of Hiroshima and Nagasaki*

By Ran Zwigenberg (ラン・ツヴァイゲンバーグ*),
Chicago: The University of Chicago Press, 2023

後山剛毅†

「被爆者は文学や芸術においても重要な貢献をしているが、彼らの影響力は社会的な面でもっとも強く感じられる。とくに1962年に私が面接した二人の優れた人物が私の心に浮かぶ」(リフトン, 2009: 上vii頁)。ロバート・リフトンは、『ヒロシマを生き抜く——精神史的考察』の岩波現代文庫版に添えた序文にこのように記し、彼の心を動かした人物として当時の広島市長・濱井信三と倫理学者の森瀧市郎というふたりの名前を挙げている。本書 *Nuclear Minds* の著者であるラン・ツヴァイゲンバーグは、リフトンが名前を挙げなかった広島大学の心理学者・久保良敏との面談に注目し、次のように述べる。「リフトンは随分と失望して会談を終えたが、被爆者にたいする久保の見解はリフトンに決断を促し、彼のキャリア、そして広島やそれ以降のトラウマの歴史に重大な結果をもたらすこととなった」(p.2)。著者は、1962年4月におこなわれたリフトンと久保の面談の結果、リフトンが広島における被爆者の精神状況の調査に取り組むことを決意したと指摘することと同時に、面談を通じてリフトンが久保に感じた「失望」にまつわる歴史——原爆と精神医学をめぐる歴史——が現在の広島で忘れられていることを暗に指摘している。

ラン・ツヴァイゲンバーグは、1976年にイスラエルで生まれ、2013年にニューヨーク市立大学で歴史学の博士号を取得している。博士論文をもとにした前著『ヒロシマ——グローバルな記憶文化の形成』においてツヴァイゲンバーグは、「ホロコーストの追悼を含む戦後のグローバルな追悼・記念の文化にとってのヒロシマの重要性や、さらには1970年代以前におけるトラウマの言説と証言、および進歩的な政治の発展へのヒロシマの貢献が、あいまいになっている」(ツヴァイゲンバーグ, 2020: 318頁)と指摘しており、同書の第4章では、これまでの広島原爆体験の記憶研究がそれほど触れてこなかった原爆体験の「トラウマ」と「精神医学」の関係を記述している。そこで著者は、日本の精神医学と被爆者の関係が、それまでのヨーロッパの精神医学と補償に関する蓄積によって根拠づけられていく過程を描き、そのうえでリフトンによる被爆者の調査とその後のトラウマ概念の発展を簡潔にまとめている。本書は、『ヒロシマ』で提示された問題意識をより深く先鋭化させたものであり、ヒロシマと精神医学をめぐる議論をより実証的に提示しようとするものである。

* ペンシルヴェニア州立大学准教授

† 立命館大学大学院先端総合学術研究科研究生
goki.atoyama.bb@gmail.com

「核の精神」と題された本書の目的は、「久保とリフトンの会談を出発点にして、原爆の影響にたいする日米の心理学の反応を調査し、そのうえで冷戦下の政治、アメリカによる否定、「原爆症」研究の難しさがどのように原爆に被爆した人々の精神的な傷つきにたいする認識を限定的なものにしていたのかを検討する」(p.6)と説明され、そのうえで著者は、リフトンと久保との面談を起点に核兵器と心理学あるいは精神医学の発展の歴史を再検討している。具体的には、精神医学の誕生から PTSD の概念形成にいたる歴史を、太平洋戦争中の日系人収容キャンプにおける心理学調査、アメリカ軍における空襲心理学 (bombing psychology) の発展、原爆投下後のアメリカにおける原子力攻撃と人間心理に関する研究の進展、日本における原爆投下後の医学的調査などの複数の関連する事象について詳述しながら紐解いている。

本書は、第1部「空襲する心」と第2部「心を調査すること、心を治癒すること」のふたつのパートで構成されている。第1部では、精神医学と都市爆撃の関係をめぐって、アメリカの精神医学の発展が記述されている。とくに通常空襲をめぐり心理的影響と広島・長崎への原爆攻撃による心理的影響の関係が扱われている。具体的には、原爆以後の世界情勢、とくに冷戦下の世界において、核攻撃による心理的影響の減算と核攻撃が敵国に及ぼす心理的影響の増大というふたつの矛盾した議論を裏づけるために、広島・長崎の原爆体験が動員されていったことが記述される。第2部では、広島と長崎に舞台を移し、実際に当地でおこなわれた研究や活動が記述される。後半のそれぞれの章には、その章のテーマにおいて中心的な役割を果たした人物が据えられ、彼らの活動の軌跡を通じて、被爆者の戦後の苦痛の一端が記述されている。

第1章と第2章は、米国戦略爆撃調査団 (USSBS) の活動に注目している。第1章では、USSBS による活動の前史として、アメリカの心理学が戦争に「動員」されていく過程、またそうした状況のなかで、「空襲」についての研究がドイツとアメリカで進展し、空襲が心理的影響を与える兵器として位置付けられていったことが記述されている。第2章では、USSBS による広島調査を指揮した人類学者・精神医学者のアレクサンダー・レイトンに注目する。まず、彼の学術的なキャリアが概観され、レイトンが USSBS での仕事のまえに、日系人収容キャンプにおいて心理学調査に従事していたことが指摘される。そうした日系人収容キャンプでの調査経験が、当時の心理学の暗黙の前提となっていたような人種差別的な意識から彼を解放していたと著者は指摘している。こうした収容キャンプでの経験が語られた後に、広島におけるレイトンの調査が描かれる。レイトンらによる調査は、原爆の生存者を集め英語とローマ字表記の日本語を併用しておこなうものであり、原爆が人体や精神に与える影響について調査された。著者は、原爆による心理的影響に関する調査が、冷戦下の国防をめぐり議論や平和運動のためのデータとして受け継がれ、被爆者たちの長期的な精神的苦痛は置き去りにされてきたことを指摘している。これらの冒頭のふたつの章を通じて、著者は、広島や長崎を対象として心理学的／精神医学的が被爆者の肉体的／精神的苦痛を無視したままに進展していったという、本書で一貫する立場を提示している。

第3章と第4章は USSBS の退役軍人の活動を対象としている。戦後の冷戦体制が強まるなかで、広島・長崎にたいするアメリカの専門家 (心理学者・精神医学者) の平和活動と軍事活動 (民間防衛) というふたつの反応が詳述される。第3章は、ふたつの反応のうち平和活動に焦点を当てて、その活動の展開を記述している。著者によれば、平和活動と軍事活動は明確に分けられるわけではなく、平和活動に従事した退役軍人たちの多くが防衛機関や原子力機関に雇用されているか、それらの機関と緊密な関係を築いていたという。こうした活動のなかで、心理学の専門家たちが原子力に

対する「非合理的」な社会の反応を科学的に「客観的」なデータに基づいて批判し、レイトンらによる国連の原子力エネルギー推進運動へといたる歴史が記述されている。第4章では、核兵器に対する心理的対処に関する研究の発展に注目して、核時代の精神としてどのような心理状態が想定されていたのかが記述される。核攻撃下での人間の心理状況に関する研究として、空襲に対する集団的な行動や、個人的トラウマに関する研究が参照されたこと、こうした心理学的な研究が軍事的な研究との強い連携のなかで展開していったことが概観される。とくにイェール大学の心理学者アーヴィング・ジャニスの研究について詳説され、ジャニスが原爆の放射線などによる長期的な被害を無視あるいは矮小化する一方で、短期的な外傷性の反応を強調することで、核攻撃による被害をコントロール可能なものとして提示したことが描かれる。最後に、こうした民間防衛の思考法が、1950年代にデザート・ロックでたびたび繰り返された核実験演習へと繋がっていったことが指摘される。

第5章以降は、一転して広島と長崎が舞台となり、日本における原爆の影響を受けた様々な研究や運動の歴史に焦点が当てられる。第5章では、1946年に広島市の比治山ひじやまに設立された原爆傷害調査委員会(ABCC)の活動に注目し、とくにスコット・マツモトの活動と彼が教育・管理したソーシャルワーカー(被爆者にインタビューをおこなう広島の女性)たちの活動が詳述される。

第6章と第7章は、日本の精神科医・小沼十寸穂こぬまますほと心理学者・久保良敏の研究にそれぞれ注目し、その展開が記述される。第6章は、日本軍の精神医学研究と日本におけるトラウマ研究の展開を追っている。とくに戦後しばらくのあいだ日本精神医学がドイツの精神医学の強い影響下にあり、そこでは心理的な影響が減算されていたため、原爆投下直後に広島に派遣された精神医学者たちも放射線の脳に与えた影響に注目し、被爆者たちの精神的なダメージに関心を持たなかったことが強調される。第7章では、久保の研究とその後の運動に焦点が当てられている。ツヴァイゲンバーグは、久保がこれまでの章に登場した多くの研究者たちと同様に、トラウマよりも原爆による短期的な被害とより大きな平和運動や被爆者救済運動などに興味を持っていたことを指摘している。そのうえで、ABCCなどのアメリカの機関と協力しながら調査をおこなっていた久保が、活動の場を核軍縮と被爆者救済の推進運動へと活動の場を移したことが示される。しかしながら、著者は久保がアメリカの立場に反対するこうした活動のなかで「科学的」で「客観的」な立場を堅持しようとしたことで、被爆者たちへの共感から遠のいてしまったことを、ホロコースト生存者に対する科学者たちとは対称的な反応であったと主張する。

第8章は、これまでの議論を引き受けたうえで、1960年代半ばから1980年代にかけてのソーシャルワーカーと社会学者による草の根運動の展開と、国際的な精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM)やPTSD概念の設立に関する委員会までのリフトンの軌跡が記述されている。そしてこれらのふたつの展開において、リフトンの研究成果が重要な触媒となっており、広島で展開された運動には「リフトン研究グループ」が存在していたことが指摘される。そのうえで著者は、日本では草の根的な運動が西欧諸国におけるトラウマ概念の一般化ほどの成果にいたらず、精神疾患に対する偏見の強さもあってPTSDあるいは「心の傷」という概念が一般化するには「阪神淡路大震災」まで待たなければならなかったと指摘している。

以上のように本書は、核兵器とくに原爆と精神医学の発展を記述した歴史書であり、これまでの研究で、その関係が根拠づけられないままに語られてきた「原爆体験と精神医学」の関係を歴史的に問い直すものである。著者が強調するように、リフトンによる研究以前は、原爆被害は基本的に「肉体的(somatic)」なものに限られていた。リフトンが久保に覚えた「失望」はまさにこの点にあ

る。被爆者の精神をめぐる研究の歴史的経緯を明らかにした本書は、原爆の記憶研究が進展している昨今の状況のなかでも重要な知見をもたらすであろう。

『ヒロシマを生き抜く』において、一貫して被爆者の言葉に耳を傾け続けるリフトンにたいして、戦後の広島・長崎を対象とした多くの社会的調査が、被爆者たちの心情に寄り添っていなかったことをツヴァイゲンバーグは強調している。しかしながら、こうした歴史を記述する本書のなかに、被爆者の「声」はそれほど見受けられない。ただし、本書の歴史的成果によって、広島原爆の記憶研究のなかでリフトンの業績が想起され、そのなかで多くの被爆者の「声」もまた想起されることだろう。リフトンは、大田洋子の言葉を引用しながらその精神的な被害を記述している。大田は、「半人間」などの作品で原爆による「不安神経症」の主人公を描き、その戦後作品において原爆と精神の問題を引き受け続けた作家である。本書を読み解くうえで、原爆による肉体的な破壊が強調されていた時代に、その心理的な影響を記述し続けた作家たちの格闘が忘却されてきたことに気付かされる。本書が原爆体験とその後の精神医学の歴史を辿る契機となることで、日本語版のリフトンの著書から欠落している原爆体験の心理的な影響と文学や芸術実践の関係を問うた部分の翻訳がおこなわれるなど、「ヒロシマ」の戦後史の捉え直しが一層促進されることを期待する。さらに、原爆体験をはじめとした戦争体験や、そのほか様々な大規模災害、悲惨な出来事の「記憶」が問題となっている現在、本書はそれらの出来事とその精神的な影響に関する議論の長い道のりを辿るための最良の書である。

参考文献

- 佐藤雅浩 (2009) 「戦前期日本における外傷性神経症概念の成立と衰退—1880-1940」『年報科学・技術・社会』18巻, 1-43頁.
- ツヴァイゲンバーグ, ラン (2020) 『ヒロシマ：グローバルな記憶文化の形成』(若尾祐司ほか訳) 名古屋大学出版会.
- リフトン, ロバート・J. (2009) 『ヒロシマを生き抜く：精神史的考察』上・下 (榊井迪夫ほか訳) 岩波書店.